【レポート②】

戸張雅登

東京芸術劇場と立教大学の連携講座「池袋学」。二〇一六年度第二回となる本講座は、二〇一四年度以来「池袋学」で扱ってきたテーマのひとつである「トキワ荘」を新たな切り口から論じました。国立公文書館館長の加藤丈夫氏を講師にお迎えし、世界に広がる漫画の原点としてトキワ荘を位置づけ、そこに集った漫画家たちの育ての親ともいえる、父親の加藤謙一氏の人生についてお話しいただきました。加藤丈夫氏は謙一氏の四男にあたり、謙一氏は、漫画家の登竜門となった雑誌『漫画少年』を創刊したほか、編集者として少年誌の出版に関わり、日本文化の発展に寄与されました。

一八九六年、青森県に生まれた謙一氏は、弘前の小学校で国語教員を務めた後、一九二一年、大日本雄弁会（現・講談社）に入社。同じく小学校教員の経験があった創業者の野間清治氏に腕を買われ、雑誌『少年倶楽部』（一九一四～六二）や『講談社の絵本』（一九三六～四二）の編集に携わりました。『少年倶楽部』は佐藤紅緑の少年小説「あゝ玉杯に花うけて」（一九二七～二八）が保護者と学校教員から広く称賛されたことで、国民的な雑誌となり、子どもたちの人格形成に大きな影響を与えました。当初、子ども向けの雑誌への掲載に難色を示した佐藤氏に対して、謙一氏は「子どもは国の宝。子どもたちにいいものを提供したい」と説得したそうです。なお『少年倶楽部』からは、少年冒険小説「神州天馬侠」（一九二五～二八）で吉川英治が、漫画「のらくろ」（一九三一～四一）で田河水泡がデビューしています。

一九四五年の終戦とともに謙一氏は講談社を退社。戦時中に戦意を煽ったとして、一九四七年にＧＨＱから公職追放を受けますが、同年、謙一氏は、尚文館（現・芳文社）が発行する『野球少年』（一九四七～六〇）の編集に携わり、戦後の野球ブームの中、ＮＨＫアナウンサーの志村正順による「誌上放送」が大ヒットを飛ばしました。さらに妻を社長とし、学童社を設立。妻子と共に自宅で編集作業を行い、『漫画少年』（一九四七～五五）を創刊しました。この雑誌が画期的だったのは、全国の漫画好き少年に投稿を募ったことです。投稿者の中には、寺田ヒロオ、藤子不二雄、赤塚不二夫、石ノ森章太郎、松本零士がいました。プロの漫画家への原稿料支払いが困難だったことから始めた作品の公募でしたが、全国から多くの漫画が集まり、『漫画少年』は一流の漫画家になるための登竜門となりました。

また、謙一氏は「新宝島」（一九四七）等を発表し、すでに関西で評価されていた手塚治虫に注目しました。交渉の結果、手塚は「ジャングル大帝」（一九五〇～五四）を『漫画少年』で連載することになり、同作によって 手塚は東京でデビューします。売れっ子漫画家の手塚に原稿を書いてもらうため、当時『漫画少年』の編集長だった加

藤宏泰氏（謙一氏の次男）は、自分が住むトキワ荘に手塚を住まわせたそうです。そこから手塚を慕う漫画家たちも住みはじめ、手塚の漫画に描かれたヒューマニズムは、トキワ荘の漫画家たちに受け継がれていきました。

トキワ荘は豊島区椎名町にありましたが、広い意味で椎名町は「池袋文化圏」に入ると加藤丈夫氏は言います。藤子不二雄Ⓐの自伝的漫画『まんが道』（一九七〇～二〇一三）には、池袋まで遊びに行き、映画を見たり、食事をしたりするトキワ荘の人々の姿が描かれています。トキワ荘の漫画家にとって、漫画のネタを集める場としての池袋と、漫画を描く仕事場としての椎名町は切り離せなかったようです。トキワ荘は一九八二年に取り壊されましたが、「マンガ・アニメミュージアム」として復元され、二〇二〇年三月の開館を予定しています。加藤丈夫氏は、トキワ荘の復元計画について触れ、世界に根付いたユニークな文化の発祥地という理念のもと、豊島区には地域活性化にあたってほしいと期待を寄せられました。

謙一氏が編集者として見守るなか、トキワ荘で描かれた漫画には、人間愛が溢れていました。寺田ヒロオの「美しさ、優しさ、愛、生と死、信頼、誠実、善意……そうした数で表現できない心の問題、それを面白く、分かりやすく子どもに伝える手段が漫画でしょう。それが児童文化ですよ」という言葉は、日本の漫画がなぜ世界で受け入れられたのかを考える上で参考になります。ヒューマニズムの普遍性は国境を超えるのでしょう。

加藤丈夫氏は、謙一氏の小学校教員という履歴に度々言及し、出版社に入り、子ども向けの雑誌を編集するようになってからも、謙一氏が教育者であり続けたことを強調されました。本講演を通して、少年雑誌や漫画の教育的価値を示したうえで、漫画はサブカルチャーではなく、世界が認める一流の文化であるという主張をされていたように思います。少子化が叫ばれ、定員割れや廃校になる学校のニュースが目新しくない今だからこそ、学校教育の外側で子どもの教育に貢献した、少年雑誌や漫画に今一度光を当てる意義があるのではないでしょうか。

（とばり・まさと　異文化コミュニケーション研究科異文化コミュニケーション専攻博士課程後期課程）